

音楽高校における世界史授業の実践報告

地歴・公民科 小林 真

Ⅰ 本校の生徒構成

下の表1は本校生徒の学年別・専攻実技別人数の表である。年度によって多少の増減はあるが、例年、だいたいこのような構成になっている。西洋音楽・邦楽の分け方を見た場合、各学年四十数名中、数名が邦楽専攻、残りの四十名前後が西洋音楽専攻ということになる。また、卒業後は、ほぼ全員が音楽大学に進学し、その他の大学や進路を選ぶ者は、ほとんどいない。このような構成や進路を念頭に置いた上で、地理歴史・公民の授業カリキュラムを考えるわけである。

【表1】

	1 学 年			2 学 年			3 学 年		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
作 曲	1	0	1	1	0	1	1	1	2
声 楽	0	2	2	0	0	0	0	3	3
ピ ア ノ	8	4	12	6	6	12	2	8	10
ヴ ァ イ オ リ ン	3	7	10	1	9	10	2	10	12
ヴ ィ オ ラ	1	0	1	1	0	1	1	0	1
チ ェ ロ	1	2	3	2	1	3	0	1	1
コ ン ト ラ バ ス	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ハ ー プ	0	1	1	0	2	2	0	2	2
フ ル ー ト	1	1	2	0	3	3	0	2	2
オ ー ボ エ	0	1	1	1	1	2	0	2	2
ク ラ リ ネ ッ ト	0	1	1	1	1	2	0	1	1
フ ァ ゴ ッ ト	0	0	0	0	1	1	0	1	1
サクソフォーン	0	0	0	0	1	1	1	0	1
ト ラ ン ペ ッ ト	0	1	1	1	0	1	1	0	1
ホ ル ン	0	1	1	0	1	1	0	0	0
ト ロ ン ボ ー ン	1	1	2	0	0	0	0	0	0
打 楽 器	0	0	0	0	0	0	0	1	1
箏 曲	0	0	0	0	2	2	1	1	2
尺 八	0	0	0	0	0	0	1	0	1
長 唄 三 味 線	2	0	2	0	0	0	0	0	0
邦 楽 囃 子	0	1	1	0	0	0	1	1	2
合 計	18	23	41	14	28	42	11	34	45

(2006年4月現在)

II 本校生徒の世界史に対する希望調査

次に、表の2・3は本校生徒に対して行った、調査の結果である。

【表2】

世界史の授業で取りあげて欲しい時代を、最低一つ選ぶ。
(調査人数 45)

時 代	人数	時 代	人数
先史時代	3	17世紀	5
古代(紀元前)	4	18世紀	5
古代(5世紀位まで)	5	19世紀	10
中世(6～14世紀位)	6	20世紀前半	25
近世(15・16世紀)	3	20世紀後半	22

【表3】

世界史の授業で取りあげて欲しい地域を、最低一つ選ぶ。
(調査人数 45)

地 域	人数	地 域	人数
中国	4	西アジア	6
東アジア	4	アフリカ	5
東南アジア	4	ヨーロッパ	35
南アジア	2	アメリカ	18

調査対象としたのは、入学したばかりの1年生である。まず、表2からは、20世紀に歴史に興味を示す生徒が多いことがわかる。複数回答であるが、特に、半分近くの生徒が20世紀後半を挙げていることが意外であった。西洋音楽を専攻している生徒が多いので、18・19世紀を挙げる生徒がもっと多いかと予想したが、意外に少なかった。実技で学習している作曲家の時代と、世界史の学習する時代が、まだ、よく結びついていないのではないかと考えられる。

次に、表3では、さすがにヨーロッパを挙げる生徒が35人と、圧倒的に多い。それに次ぐのは、アメリカとなっている。こうした興味の傾向は、音楽高校である本校に限ったことでなく、日本の高校生に一般的に見られる傾向ではないかと思う。

Ⅲ 世界史授業の年間指導計画

これまで述べてきた状況を考慮して、年間授業計画を表4のように立てている。本校では、他の教科の授業時数の関係で、世界史は世界史Aを学習している。2単位の科目なので、年間の授業時数は70時間となる。特に本校の生徒の専攻との関係で考慮した点は、次の点である。まず、西洋音楽を学習する上では、キリスト教の知識は重要であると考えられるので、「ローマ世界とキリスト教」の単元で、ユダヤ民族の歴史、ユダヤ教の成立、キリストの布教、キリスト教の成立と発展などをある程度詳しく学習する。次に、「ヨーロッパ封建社会」の単元でも同様の理由で、ローマ＝カトリックの成立と発展、ギリシア正教について、教皇権の拡大などを、比較的詳しく学習する。「ヨーロッパの絶対主義」の単元では、次章で述べるような、音楽家と歴史とを関係づける学習をするので、多めに時間を取ってある。「フランス革命とナポレオン」「自由主義と民族主義の進展」の単元も、世界史を学習する上でも、重要であるし、また、ここでも音楽家と関連づけて学習するので、ここも多めに時間を取った。

【表4】

世界史A 年間授業計画

指導項目	時間数
人類の誕生と古代文明	2
東アジアと中国文明（中国は、元王朝まで）	4
古代インド	1
イスラムの成立・イスラム世界の発展	2
ギリシア世界	2
ローマ世界とキリスト教	3
ヨーロッパ封建社会	4
ルネサンスと宗教改革	2
近代以前のアフリカ・アメリカ	1
ユーラシアの交流圏	2
世界の一体化とヨーロッパ支配	2
ヨーロッパの絶対主義と世界	4
近代思想の発達	1
イギリス革命	1
アメリカ独立革命	2
フランス革命とナポレオン	4
産業革命	1
自由主義と民族主義の進展	6
帝国主義の成立と世界分割	4
アヘン戦争と中国（中国は明王朝から）	4
第一次世界大戦	3
ヴェルサイユ体制	3
各地の民族運動	2
ファシズムの台頭	3
第二次世界大戦	2
冷たい戦争	3
アジア・アフリカの独立	1
現在の世界（中東紛争その他）	2
合 計	70

Ⅳ 世界史授業の中で扱った、作曲家と歴史事項の事例

次に、生徒に、自分の専攻実技と世界史の授業を少しでも関連づけるため、授業の中で、扱った事例を紹介する。

①プロイセンの絶対主義とバッハについて

ここでは、ドイツの絶対主義は、各領邦国家で発達したことを学習し、その例として、プロイセン王国とオーストリアを取り上げる。授業の中で、プロイセン王国の前身が、ブランデンブルク辺境伯領だったことを説明する。本校の生徒は、ここで、バッハのブランデンブルク協奏曲集を連想するので、この曲集が、当時の、ブランデンブルク公に捧げられたものであることを紹介する。また、代表的な絶対君主として、フリードリヒ2世を取り上げるが、彼が1747年（35歳）の時に、62歳のバッハに会い、バッハはこの時、フリードリヒが、即興演奏の為に与えたテーマを元に、「音楽の捧げもの」を誕生させた事も紹介する。

②18世紀初頭のイギリスとヘンデル

バッハと同時代の作曲家にヘンデル（1685～1759）がいる。彼は1712年にイギリスに移住した。世界史の授業では、清教徒革命・名誉革命の学習をおこなった後、引き続いて、イギリスにおける議会政治の成立を学習する。イギリスではアン女王の死後、ドイツからハノーファー選帝候がやってきて、国王ジョージ1世として即位した。ジョージ1世は、英語が苦手で、国政を首相のウォルポールに任せため、イギリスにおいて、責任内閣制が生まれた。この時代に、ヘンデルは「水上の音楽」を作曲した。ジョージ1世の死後、ジョン＝ケイが「飛び梭」を発明、産業革命が起ころうとする中で、ヘンデルは、数々のオラトリオや「王宮の花火」等を作曲した。

③オーストリアの絶対主義とモーツァルト

オーストリアの絶対主義の授業では、マリア＝テレジアとヨーゼフ2世を取り上げる。この授業の中では、1762年（モーツァルト6歳の時）、シェーンブルン宮殿に行き、マリア＝テレジアの前で演奏したことを、紹介する。また、1787年に、モーツァルトがヨーゼフ2世のもと、宮廷作曲家となり、多くの作品を残したこと、マリア＝テレジアやヨーゼフ2世は、他にも多くの音楽家や画家を保護したこと、多くの美術館やコンサートホールを建設し、現在でもその多くが使用されていることなどを、学習する。1789年にフランス革命が発生し、モーツァルトを高く評価していたヨーゼフ2世も死ぬと、音楽会収入も減り生活が苦しくなっていくことも話す。このように、一般の高等学校の世界史では、オーストリア絶対主義のところでは、オーストリア継承戦争や七年戦争、啓蒙専制君主といったところを中心に学習するが、本校では、それらの解説は簡単にとどめ、ウィーンが「音楽の都」と呼ばれるようになっていく過程を学習する。

④ベートーヴェンとフランス革命・ナポレオン

まず、生徒達に「ベートーヴェンの第九交響曲第四楽章〈歓喜の歌〉は、何を喜んでいるのか」と質問する。大抵、その答えは「耳が聞こえなくなるような人生の苦しみに打ち勝った喜び」というようなものが多い。そこで、彼がこのシラーの詩に出会ったのは、1789年、ボン大学文学部に聴講生として通っていた時、フランス革命勃発の報に、接した時のことであり、単に、個人的な苦しみの克服だけでは無い事を説明する。

ベートーヴェン（1770～1827）が、貴族の令嬢との結婚に成功しない事からは、当時の身分制

社会（特にドイツがイギリス・フランスに比べて社会の発展が遅れていた事も含めて）についての説明につなげる。当時の社会では、どんなに才能があっても、貴族は平民を、自分達と同等の人間としては扱わなかった事を知って、考えさせられる生徒も多い。

フランス軍がオーストリアに進駐し、フランスの駐オーストリア大使から、交響曲の依頼を受けたベートーヴェンは、これを快く引き受ける。他のウィーン市民の中にも、ナポレオンが自らを「革命の子」と称すると、彼が封建社会を破壊してくれる、と考え、心の中でナポレオンを応援した者が少なからずいたことも説明する。これは、ナポレオンが短期間に、絶対主義体制にある多くのヨーロッパ諸国を征服できた理由を説明する際にも、格好の例として挙げられる。

ナポレオンが皇帝になった事を聞いたベートーヴェンは、いわゆる《英雄交響曲》の表紙に書いてあった「ボナパルトと題す」という文字を怒って消し、「彼もまたそこいらにいる権力亡者」と言った、という有名な話からは、時期は少し遅れるが、やがて多くの諸国民が、ナポレオンの支配を、新たな圧政と感じ、解放戦争を始めていく例として取り上げる。

⑤ ショパンとポーランド分割

まず、ロシア絶対主義の学習の中で、エカテリナ2世による、ポーランド分割を取り上げる。ポーランドは、1795年に行われた、第三回の分割により消滅し、再び独立を回復するのは1919年であることを、紹介する。そこで、フレデリック＝ショパン（1810～1849）は、まさに、ポーランドが、完全にロシア・プロイセン・オーストリアによって支配されていた時代に生を受けたポーランド人であった事がわかる。

19世紀、フランスの歴史の中で、1830年に発生した七月革命を学習する。その際、七月革命の影響として、1830年に発生して、1831年に失敗に終わったポーランドの革命運動も取り上げる。そして、その中で、ウィーンでの演奏活動を終えて、パリに向かう途中のショパンが、革命運動失敗の報を受けて、エチュード《革命》を作曲した、という伝説を紹介する。

⑥ 大資本家の息子メンデルスゾーン

19世紀フランスの歴史の中で、ルイ＝フィリップによる七月王政（1830～1848）を取り上げる。七月王政の中で、政治的実権を握った銀行家などの大資本家について、国は異なるが、ドイツ（ハンブルクのちベルリン）の銀行家の息子として生まれたフェリックス＝メンデルスゾーン（1809～1847）を紹介する。彼は、作曲家としてだけでなく、当時すでに忘れかけられていた、大バッハやベートーヴェンの作品を、多くの演奏会で取り上げて、大きな功績を残したが、たびたび、演奏会を開くことが出来たのは、大資本家としての、メンデルスゾーン家の資金力が力を発揮したといえる。この時代、ドイツはもとより、フランスも産業革命以前ではあったが、銀行家などの大資本家が社会的に活躍していたことがわかる。

⑦ ビスマルクとブラームス

ヨハネス＝ブラームス（1833～1897）が、成人してからの時代は、ドイツで民族統一運動が高まり、プロイセンを中心にドイツが統一され、その結果生まれたドイツ帝国が、産業革命を達成、ヨーロッパの強国にのし上がった時期に重なる。彼はハンブルクに生まれ、1862年以降はウィーンに住んだが、終始、ドイツ民族であることを自覚し、「鉄血政策」を進め、強引に周辺諸国をプロイセンの支配下に置くビスマルクを支持した。自室にビスマルクの肖像画を飾り、プロイセン＝オーストリア戦争の時は、敵国であるにもかかわらず、プロイセンを応援していたこと等を紹介

する。この事を例に、当時、ドイツだけでなく、多くの民族の中で、ナショナリズムの運動が高まったことを、学習する。日本の明治維新も世界史の流れで捉えれば、こうしたナショナリズムの一つの表れであると言える。この点も、授業で取り上げて、日本の歴史も世界史の流れと大きく結びついている事を、説明する。

⑧ワグナーとドイツ統一

ドイツの統一に関して、もう一つ事例を挙げる。リヒャルト＝ワグナー（1813～1883）に心酔して、多くの援助を与えたバイエルン国王ルートヴィヒ2世（1845～1886）についてである。ドイツ帝国が成立した時、各地の領邦国家がその支配下に入ったが、南ドイツのバイエルン王国もその一つだった事を、紹介する。この時バイエルン王国の国王だったのが、ルードヴィヒ2世である。また、ワグナーに関しては、1848年のフランス二月革命の影響を受けて、ドイツで発生した革命運動との関係も、取り上げる。彼は、政治的な文献を所持したりはしなかったが、芸術的理想のためには、古い社会は打破されるべきであり、そのための社会革命には、大いに賛成だった。1949年5月のドレスデン蜂起では、戦闘には積極的に加わらなかったが、蜂起に深く関わった。そのため、警察に追われる身となり、スイスに逃亡することになった。その後、ワグナーは追放解除令を解かれるが(1860)、多くの演奏活動で借金が重なり、苦境に立っていた。この苦境を救ったのがルードヴィヒ2世である。

彼は、ワグナーの楽劇を大変気に入り、王宮にワグナーを招く。そして、借金を肩代わりし、莫大な年俵を与えた。これに対して、ワグナーは、＜マイスタージンガー＞＜ワルキューレ＞などのオリジナル手稿譜を王に献上している。また、ワグナーが彼の作品を上演するために造った、バイロイト祝祭歌劇場は、ルードヴィヒ2世の援助で建てられたことも、紹介する。音楽とは、直接関係はないが、ルードヴィヒはバイエルン国内に多くの城を建築し、莫大な国家予算をそのために使った。その一つが、ノイシュバンシュタイン城であり、この城がアメリカのディズニーランドのシンデレラ城のモデルになった、という話などは、生徒も興味を持って聞くようである。

⑨ショスタコーヴィチとスターリン

ドミートリイ＝ショスタコーヴィチ（1906～1975）については、比較的新しい時代であるにもかかわらず、彼の生きた時代の多くの部分がスターリンの独裁時代と重なるため、謎の部分も多いようである。従って、授業では細かいいきさつには深入りせずに、次のようなことを紹介する。まず、彼が11歳の少年だった頃(1917年)、ロシア革命が起こった。この革命によって生まれた社会主義国家の中で、彼は学生時代を過ごす。1923年、レニングラード音楽院のピアノ科を、そして1925年には作曲家を卒業する。その頃にはロシアはソビエト社会主義共和国連邦となっていた。1924年のレーニンの死後、ソビエト政権内部では、激しい権力闘争が繰り広げられていた。ショスタコーヴィチは、1926年に交響曲第一番を発表し、賞賛を受ける。また、1927年、ショパン国際コンクールでも入賞した。この頃のソ連は、革命から日が浅く、マルクスやレーニンの説いた、労働者の理想社会を実現しようとする雰囲気もある中で、若きショスタコーヴィチは、音楽の面でも、現代的な作風とマルクス主義のイデオロギーの結合を試みようとする(交響曲第二番：1927年)。1928年から1932年にかけての第一次五カ年計画、1932年から1936年にかけての第二次五カ年計画、とソ連は計画経済を推進し、工業化社会へと移行した。ショスタコーヴィチのこの期間、あらゆる分野の劇音楽に関わり、華々しく活躍していた。

1936年にスターリン憲法が制定される頃から、スターリンによる粛清が激しくなってきた。時

を同じくして、ソ連共産党はショスタコーヴィチを「プラウダ」紙面で攻撃し始める。作曲家仲間からも攻撃を受けた彼は、大変な苦境に立たされる。大いに苦しんだ結果、1940年にはピアノ五重奏曲でスターリン賞を受賞するまでになる。第二次世界大戦の勝利の後、再び、スターリンによる締め付けが強化された。1948には、共産党の人民委員により、ショスタコーヴィチは名指しで「反民主的」と非難される。彼は、スターリンを絶賛する内容の映画の音楽を作曲させられたりする。1953年のスターリンの死まで、何曲もの作品をショスタコーヴィチは発表しなかった。このように、ショスタコーヴィチの音楽活動は、ソ連の歴史との関わりなしには理解できないものである。こうした学習を通して、また、ソ連という国が、労働者にとっての理想郷を目指しながら、やがて、共産党の、そしてスターリンの独裁国家へと変質し、その中で死亡者400万人(一説には2000万人)と言われる大粛清が行われていったこと、創作活動の自由が奪われていった社会が、やがて文化的経済的にも発展が遅れてしまったこと、そして、1989年のベルリンの壁崩壊を機に、社会主義各国が動乱に見舞われ、ついに1991年、ソ連も崩壊したこと、などがより良く理解できるようである。

⑩ピアノと産業革命

最後に、作曲家の事例ではないが、ピアノ発達と産業革命について、授業で扱ったことを報告する。

最初のピアノ（ピアノフォルテ）は18世紀の前半にイタリアで製作されたが、むろんこの時代はすべて手作りだった。決まったモデルはなく、一台一台、形も異なり、また当然、価格も非常に高かった。音域も、18世紀末までは、5オクターブが標準であった。18世紀中頃、産業革命が始まり、製鋼法も発達を始める。1780年代になると、強いフレームの製作が可能になり、弦の弾力が増し、力強い音が出せるようになった。19世紀に入ると、年を追って音域が広がる。アップライトピアノが製作されるようになったのも、1800年からである。ヨーロッパ各国に産業革命が広がっていく中で、ピアノの改良も進み、高品質のピアノ線が作られるようになった。1840年代には、現在見られるような、鋳物の頑丈な鉄骨を組んだ強力なフレームが普及するようになった。ショパンやリストが多くのピアノ曲を作曲した時代も、まさにこの時代に一致する。こうしてヨーロッパにおける産業革命の広がり、ピアノの発達に大きな影響を与えたと言える。

V まとめ

以上、これまでの世界史の授業で取りあげてきた事項を10例ほど紹介させていただいた。むろんこれ以外の事項もたくさんあると思うので、今後、教材研究を行う中で、調べていきたいと思う。生徒の反応も、やはりこうした内容を学習するときは、真剣さが増して良いようである。(中には、世界史の時間くらい音楽のことを忘れたい、と言う生徒もたまにはいるが)

最後に、ここに紹介した内容の中に、私の勉強不足のため、誤りもあるかと思うので、よろしくご指導賜りたい。

※ I・IIの人数、調査に関しては、2006年度の資料である。